

## アンガージュマン文学の誕生と没落

沢 護

世界の変貌は、小説の変貌に繋がる。1914年の大戦が、ブルジョワ演劇に終焉を与えたように、1919年以來の知的活動の中心は、19世紀末の甘美で懐疑的なものから離れ、創造の中で、行動とか運命といった社会的かつ心理的なものを追求するようになっていった。これは、彼らが、革命の世代に入ったことを認識し、自己の体験をもとに、新しい存在をうちたてようと望んだことにほかならない。既に名をなしていた、ジッド、ヴァレリー、クロードル、ブルーストたちは、無意識のうちに栄光の沈黙を守っていたのに対して、戦争という罪悪と悲劇の苦汁を呑された若き活動家たちは、新しいモラルを受持って、社会、政治、文化、歴史といったものへ反抗を示し、苦悶、証人、行動の文学と呼ばれるものを創造していった。彼らにとって、もはや文学の形式は二義的であり、ただ、何ものかに反抗することに意義があった。だが、第一次大戦後の運動——ダダやシュールレアリスム——が既成の文学を破壊する目的があったにしても、戦争で勝利をおさめた「大いなる快活さ」は残っていた。人生に対する、運命に対する解答は用意していた。

だが、1930年という文学史上の転換期は、ヨーロッパに広がった一種の行動のローマン主義で代表され、これが多くの作家——ユンガー、T、E ローレンス、マルロー、モンテルラン——に力を与えることになった。この歴史の論争には、もう古典作家とみなされていたマルタン・デュ・ガールのような作家が、『一九一四年、夏』で、「存在すること、思考するこ

と、信じることは、みなつまらぬ！」と歴史に反抗する気迫をみせ、「行動と思想は、つねに、共にでなければならない」と叫んで参加する。ローレンス、ユンガー、マルロー、モンテルラン、ヘミングウェイ、さらには第二次大戦直後に自殺したロシュエルらが、歴史や運命や死の論争に参加するようになっていったのも1930年の世代であった。彼らは、近い将来、歴史の圧力の下での衝突をさげえないものと感じながら反抗し、新しい出口を捜し求めている。マルローやサン・テグジュペリーが、よく読まれたのもこの両大戦間における兆候であり、第一次大戦に散ったギーヌメル、メルモスやジョゼフ・ケッセルらに崇拜を見せたのも、彼らを新しい一服の清涼剤としてみなしていたからである。絶望の中から救われようと、冒険や革命を求めたマルロー、狩猟や闘牛を選んだヘミングウェイ、中近東へ旅立ったローレンス、又、相当数のシュールレアリストが коммуニストに参加していったのは、もはや絶望しかないヨーロッパの未来にたいし、ただひとつの可能な出口を求めたからにほかならない。この唯一の脱出孔こそエロイズムと呼ぶにふさわしい行動の道であった。彼らは、個人尊重に重きをおくブルジョワ文化から救われたかったのである。個人の人格、勇気、環境とからなる人間に内在する要素から生れるエロイズムは、ブルジョワ文化によって育成、形成される。この意味で、過去の英雄を証人とするまでもなく、たとえどんな些細な人間であっても、運命の波にのりさえすれば英雄となりうるといったトルストイの言葉は正しい。英雄は、一口に云って個人より卓越したものであるが、環境によって作られ、その行為は社会規範に由来する。しかもその思想は、綿密さを必要とせず行動によって先動される。異常なまでの個性と欲望、稀有な知的能力と思索、さらに伝説めいた英雄的才能を持って、行動へかりたてられていったローレンスの失敗は、彼のあまりにも綿密な思索のゆえであった。英雄が、群衆から抜きんでようとする姿と、1930年代における幾多の作家が行動の道に、自分の未来を賭けていったのと変るものではない。彼らは、19世紀の思索に

あきたらず行動に己を投げだしていったが、これはこれまでの歴史の示す正しい反映であり、当然の実践でもあった。世界の変貌は、急速に鋭敏に作家の間に浸透し、行動礼讃の風潮が開花し、着実に実行されていったが、これは実に歴史の変貌が敏感に小説の変貌につながることを示している。

1930年頃における新しいデビューは、マルローの『王道』『人間の条件』サン・テクジュペリーの『夜間飛行』、アルランの『秩序』、グリーンの…枚挙にいとまのないほどの作品が発表されたが、これは第二次大戦前の不安と焦躁の思想と、不安に対するエロイズムへの追求といった精神の高揚が示されたもので、まさしく、第一次大戦前のプルースト、アポリネール、ヴァレリーらの創造と類似している。

1930年代の行動は、常に思索に優先したが、その行動の意味は、行動の一形式が思索であった点に注目しなければならない。

「私は、行為の（価値）を信じる。おもうに、思想と行動を区別するものは、私にはいつも幼稚な人間か、さもなければ盲目的人間に思えたのである。市場の品物に変わった思想なる観念だけが、行動と区別される。」<sup>2)</sup>

新しく生れた行動のモラルが、社会とか死とか歴史といった既成観念に対する反抗のモラルであり、世界に対する抵抗が、それ自体ひとつの行為であるとする(『王道』)。しかも、精神的苦行や自虐行為を『冒険』と呼んで、危険と悲劇性を求めていった行為は、孤独の中での思索の一形式だとみなしていた。この危険な行為の内にある孤独は、常になんらかの魅惑的な規則に規定されている。「規則というものは、宗教の儀式みたいなもので、馬鹿げたもののようであるが、人間を陶冶してくれる。」<sup>3)</sup>さらに、この『夜間飛行』のリビエールは、行動のためにしか、それも劇的行動のためにしか命を賭けない。彼にとって、なによりもまず、行動は孤独になることであり、人間に思索とその根源の回帰を求めることだとしている。

1930年代に急速に広まった行動のローマン主義は、まずマルローで代表される場合が多いが、この行動の波は、サン・テクジュペリー、ユンガー、プシカリに力を与え、アラゴン、カミュ、サルトル、アヌイといった作家にまで貫き、彼らも又、社会規範や神の恩寵に反逆することで、ひとつの道を見出そうとしていた。例証の必要もないが、『征服者』『カリギュラ』『アンチゴヌ』といった作品で、共通の舞台、共通の目的——勝利とか敗北など——を知ることができる。この頃、着実に己れの変貌を企てていたサルトルは、このような文学的クリマを『文学とはなにか』の中で美事に歌いあげ、第二次大戦後の小説が、歴史と形而上学性によって条件づけられていることを強調し、歴史への参加を呼びかけたのである。

「……われわれは、物を行動の中に浸してみなければならない。……世界と人間とは企てによって現わされる。そして、われわれが語りうるあらゆる企ては、歴史を作るというただ一つの企てに帰着する。今や、われわれは、人間の手によってプラクシス（行動、実践）の文学を開始するためにエクス（所有）の文学を放棄しなければならない時にまで導<sup>4)</sup>びかれたのだ。」

また、こうもいう。

「マルローには、シュールレアリストたちやドリュでさえもが平和の文学に身を献げていたときに、われわれが戦争の中にあること、また戦争の文学を作るべきであることを、彼の最初の作品のときから、既に認識しているという偉大な功績があった。サン・テクジュペリーに関してはわれわれの先輩たちの主観主義や静寂主義に抗して、彼は、労働と道具との文学の偉大な特徴の下絵をえがくことができた。私はもっと先のところで、彼が消費の文学に代ろうとする建設の文学の先駆者であること

を示すだろう。戦争と建設『なすこと』と『もつこと』と『在ること』人間の条件、これが今日の主要な文学的哲学的テーマである。<sup>5)</sup>」

サルトルからの引用は長くなったが、彼が『われわれ』と呼ぶとき、マルローやサン・テクジュペリーの名がふくまれていることを強調し、この二人の作家を『第三の世代』<sup>6)</sup>の文学的風土の先駆者とみなしている。この二人の作家のほかに、サルトルはコルネイユにも賞讃を示しているが、これら三人の間に見られるモラルは、英雄的な要素が内在している。しかし、サルトルのモラルが、赤裸に恥部をさらけださせようとする人間や、作中人物の愚劣、醜悪を示すといったものであるのにたいして、マルローやサン・テクジュペリーが、時おり見せる悲愴感や無気力といったものから遠くへだたっているのを知るのである。とにかく、1930～1940年における文学の嵐は、マルローが反ファシズム大会の演壇でいみじくも絶叫した、「もし、戦争になったら、われわれの身をおくべきところは赤軍の戦列である」との言葉通り、ほとんどの作家は、自らの夢と希望を行動の道に託し、新しい再建の世代へと突入していったのである。

サルトルが歴史への参加を強調し、自らも提唱した文学は、一般にアンガージュマンの文学と呼称されている。われわれの社会の諸問題を提起し政治的関心を目ざめさせ、作家としての責任を自覚することを主唱したこの「アンガージュマン」から何が残ったのかわもっと先のところで触れることになるだろう。『文学とはなにか』の時代のサルトルの態度は非常に硬直したもので、自分と同じ目的をもち同時代の作家として、マルロー、サン・テクジュペリー、ケストラー、カミュ、ルーセを挙げただけであった。だが、教化的文学の危険を見抜いてか、『聖ジュネ』の中でカフカ、ジュネ、マラルメといった政治とは関連のない作家をもアンガージュマン作家に加えた。だが、これとても道徳的文学とロブ・グリエに非難されているのである。

死という宿命を背負い、社会や歴史にたいする反抗のモラルは、戦争という悲惨さや実存主義の洗礼を受けて誕生するにいたった。だが、この文学は決して両大戦間にのみ作られたわけではないことは、歴史への論争に参加したマルタン・デュ・ガールを引合に出した。

1918年から約10年間の歴史の休止時を経て、いくつかの鐘が響きわたった。モーリアックの『テレーズ・デスケイルウ』、ジュリアン・グリーンの『閉ざされた庭』、ベルナノスの『悪魔の陽のしたに』が同時に鳴りわたった。『テレーズ・デスケイルウ』は、毒を盛った女の話ではない。サン・テクジュペリーが砂漠に消えた飛行士を描くのも、人間の運命と奇跡を追求しているにほかならない。マルローは、中国革命を物語りながら『人間の条件』と名づけた。もはや、歴史への配慮は永続的なものとなったのである。近づいてくる戦争の危機とファシズムの脅威との足音は、着実に文学にしのびこみ、自由は責任として考えられ、自由は悲劇的になっていった。悲劇的感情は、ここではもう小説の中心的な動機になったのである。戦争の体験から新しい型の主人公を描くものにマルロー、ヘミングウェイさらにT・E・ローレンス、ユンガー、モンテルラン、ドリュ・ラ・ロシュルがいた。チボーデに「復員者の文学」と呼ばれたモンテルランやドリュ・ラ・ロシュルにもっと正気と純粹性があつたならば、マルローやサン・テクジュペリーなどの場合のように称讃と巨匠の風貌を示し得たかもしれなかったのだ。

新しい型の小説には、程度の差こそあれ、ブルジョワ的凡庸をまぬがれて、英雄的な靈感の風が抜く吹き荒れた。1930年代において、ゴンクール賞審査委員会は、つぎの諸作品に賞を与えた。マルローの『人間の条件』アンリ・フォコニエの『マレジー』、ロジエ・ヴェルセルの『コナン大尉』ジョセフ・ペイレの『血と光』、シャルル・プリニエの『贗旅券』、ヴァン・デル・メルシュの『神の刻印』である。世間の好みに敏感な反応をみせるゴンクール賞ではあつたが、これらの多種多様な作品は戦争や冒険を主

題にした英雄の姿を描くといった共通の素材をそなえていた。ここでは、愛やロマネスクな感性はうすばやけてしまっている。だが、これらいくつかの作品は、あのスペイン内乱を描いたヘミングウェイの迫力や芸術性におよばなかったように思われる。又、この時代の民衆的な英雄であったメグレ探偵は、ジョルジュ・シムノンの想像力の豊かさと天賦の才のおかげとはいえ、そこにはやはり勇敢な行動と不安動揺する多くの主人公に負っていて、探偵小説的な小説形式を文学の水準にまでたかめる役割をになっている。このように、想像力を求める文学の世界に、英雄的感觉と行動礼讃の風潮がいたるところに出現したのも、迫りくる暗雲が彼らに強い意志と勇気とを必要とする時代に突入したことを自覚させたからにほかならない。

われわれはここでサン・テクジュペリーとアンドレ・マルローに遭遇する。行動の文学を語ろうとするとき、必ず引合にだされるこの二人は、秀れた知性と大いなる勇気とを結合させた20世紀の証人だったからである。サン・テクジュペリーが『南方郵便機』や『夜間飛行』を、マルローが『人間の条件』や『王道』を世に問うたのは、ほとんど時を同じくしてであり、当時の人々の求めているものへの解答をなしたのであった。二人の行動に関して同じ意味での考察はさげなければならないが、作品の生れることとなった基盤は、まさしく危険で悲劇的なものを求めるという文学的な要素によるもので、具体的に体験された冒険のみが、感動と真理とをもたらすという風潮の故によるのであった。彼らの行動は、なによりもまず孤独になることで、その中で危険と苦しみとを考えるという思索の一形式であり、瞑想の方法はいつでもよく、ただ己れを行動に追い込み、戦場と死とをまえにして、人間に思索とその根源への回帰を、さらに恐怖と根源的反逆とを体得させるのだ。

すでに、自殺、テロリズム、死といったテーマは、使いふるされたものであったが、この不安の時代に、自己を不安に落とし入れ、死と直面して、

はじめて危険とか行動の究極を見極めようとする。

サン・テクジュペリーは、みたところ少しも動かない操縦室の中で、飛行機の故障と暴風とに脅かされながらも、驚くほどの冷静さを保ち続け、  
「人間の働きをしてみて、はじめて人間の苦悩を知る。」<sup>7)</sup>この人間の精神に圧力を加える帝国こそ、新しい好みを現わしている。行動を描く彼の作品はもちろん、20世紀の冒険作家たちは、自分たちに要求せずにはおかない規律を課している。サン・テクジュペリーの場合のそれは、職業的な規律である。僚友との連帯関係に重きをおき、それを通して職業を賞讃し、常に規律を重んじるという理想的かつ組織的なものでさえあった。少なくとも『南方郵便機』では空想的であったものが、『夜間飛行』ではロマンティックなものに心を奪われている行動者は、『人間の土地』から『戦う操縦士』では英雄的なヒューマニズムへ思想を展開し、行動の意義を批評し、行動者から創造的な行為をし、己れより永らえるものへの建設に向っている。このテーマは『城砦』の中で多くの象徴を秩序立てて描きだしている。

「いかに行動が緊急を要するものってあても、われわれには行動を命令すべき使命を忘れるわけにはいかない。さもないと、この行動は、  
実を結ばないであろう。われわれは人間の尊厳を築きあげたいのだ」<sup>8)</sup>

サン・テクジュペリーの行動の意味は、もはや革命的かつ冒険的行動と区別しなければならないときにきている。マルローの主人公たちが巻きこまれたのは、それは革命という大きな時代の波だったのだ。ただ、二人の間の出発点には、死に直面し、その死に抵抗することからするべき行為を見いだそうとする類似性はあった。『夜間飛行』では、行動が死から救ってくれると考えている主人公は、「人間の生命に価値はないのかもしれないが、われわれは、常に人間の生命以上に価値あるものの如くに行動している。が、果してなんなのであろうか」<sup>9)</sup>と語る。リビエールが働くのは、



「人間の生命に比べて、救うべきしかも永らえる他のなにものかが存在する。おそらく人間のこの部分を救うがために彼は働くのかもしれない。さもなければ、行動は弁明<sup>10)</sup>されないのだ。」といった言葉は、『王道』で語られた、たとえ行為が殺人、狂暴、破壊などの犠牲をはらっても、何らかの価値があるという英雄的モラルと変るところがない。

マルローは、自分の体験にもとずいて作品を書いてきたといわれている。事実『王道』の舞台であるアンコール遺跡群の描写は、それを説明している。この作品の背景は、クメール文化の最高の遺産で優雅な『バンテアイ・スレイ』遺跡への冒険である。現在でさえ雨期になると行くことのできないこの『バンテアイ・スレイ』は、アンコール・ワットより遙か遠い大密林の中にあるが、この浮彫のあまりの美事さからマルローはパー・レリーフをフランスに持ちだそうという強い欲望にかられた。だが、この事件が発覚して、彼は『アンコール遺跡群バンテアイ・スレイ神殿における記念建造物破壊 および 窃盗せる浮彫り横領』という長い罪状で起訴され、禁固刑の判決を受けるはめになった。この点で、『王道』は彼の体験によるものと判断できるが、『人間の条件』や『征服者』の背景になった広東革命や上海革命にはマルローは参加していない。彼は上海や広東を幾度となく旅をしているが、上海革命当時にはパリに、1925年の広東革命の年にはサイゴンにいた。もちろんマルローが革命に参加していなかったからといっても、彼の作品に求めた死、冒険、革命といった人間のぎりぎりの極限の中で新しい人間の生きるべき姿を眺めようとした価値は少しも変るものではない。マルローの主人公の示す冒険的行動は、たとえ主人公を革命とか党とかに結びつけている場合でさえ、不安で悲劇的である。同時に死を非常に恐れている人たちである。死はマルローにつきまとい、『王道』のジゾールや『人間の条件』の陳の場合のように、死を讃美し、できる限り死に甲斐のある死を乞い、死に意義を持たせようとする。又、死の近いことを知った登場人物は、異常なまで死を高揚しているのも、マルロー特

有の死の考え方である。蔣介石の自動車に爆弾を投げこむ瞬間の陳には、自分の死の近いことを知っていた。マルローの死にたいする恐怖感は、先天的なものであり、彼の行動は不安から逃れるための手段であった。そのため、ニヒルさが目立つのではあるが、『王道』で示す大切なことは、なにか行動につながっていると考えているガリーヌが、行動以外の一切については、全く意識の外に在るといったように行動の価値を評価するのである。マルローが、冒険から革命へと進んでいったのにたいして、サン・テクジュペリーは、ユマニスムへの道をたどる。したがって、マルローにはニヒルさが、サン・テクジュペリーには精神主義が強まってゆくのである。

マルローの行動は、サン・テクジュペリーのそれよりも、むしろT・E・ローレンスに近い。『アルテンブルグのくるみの木』の父なる人物は、哲学教授からトルコ民族の政治活動を指導することに転身するが、実にローレンスの姿を彷彿させるものがある。1946年に書いたマルローの『ローレンス論』では、ローレンスの神話にたいするマルローの羨望の念が読みとれる。だが、この作品には、リアルさが欠け、無理なプロットが目立ちすぎるようである。

ローレンスは、必要以上に金銭関係を忌み嫌い、人間関係を尊重してきた。彼が、芸術作品に飽きたらず、思想問題や社会理論に走ったのは、芸術家がしばしば落ち入る「芸術はあくまで個人的な幻想にすぎない」といった自己否定によるのである。それ故にこそ、彼は墓場ともなりかねないヨーロッパから、新しい人間関係を求め、異邦の地に充実した己れの生活を見出そうとした。彼は、意識の中で、ブルジョワ社会の頹廢から逃れ抗争しているが、その頹廢の原因を探ることはせず、又、ブルジョワ文化や意識から逃れることはできなかった。ローレンスの失敗は、人間が生れながらにして自由であるのは、社会的な関係を見捨て得ることができるとした誤謬にあった。人間には、性本能よりも遙かに強い集団本能があるのだとしてヨーロッパを後にしたローレンスの言葉には、意識的とも想える

知的で難解な表現が多く、ともすると矛盾さえも伴う。

「私の偉大な宗教は、理知よりも秀れたものとしての血や肉への信仰である。精神によっては問題も起す。だが、われわれの血が感じ、信じ、表現することは常に真実である。知性とは、ただ拘束であり抑制であるにすぎない。知識などどうでも構うものか。私の欲するすべては、自分の血に直接に答えることだ。意識とか道徳とか何とかのぶざまな介入などなしに。<sup>11)</sup>」

ローレンスは、『知慧の七つの柱』の中でも戦いながら死に赴くこと以外、勝利への導きはないと信じている。この行為は、生命を捧げる英雄的なものと説明できるが、他人を死に向わせることは竊盗行為でしかないと語るとき、サン・テクジュペリーの他人を死に追いやる憧憬とは何と遠くはなれていることか。ローレンスの孤独は、異邦の地で正当化しようとするほど重くのしかかる。はじめ、直観によって人間の感情を鋭く感じとっていた純粋な芸術家の頃は、自分の望むままの行動が成功に繋がっていた。しかし、理想が現実から予言となるにつれて、彼の目的は意図しない方向へと向っていったのである。

悲劇の10年間の幕がヨーロッパの上にひらかれつつあった前に、両大戦間のいまだ幸せの瞬間はあった。この30年代の10年間、フランスの小説には、どれほど傾向が異なり、世界観がどれほど違い、主張や行動がどれほどかけはなれていようとも、アヌイも、カミュも、マルローも、アラゴンも、サルトルも、ベルナノスにも、彼らには孤独の中で自分の運命を作りあげ、社会規範や恩寵に反抗するという戦いは残されていた。だが1940年6月のフランスの無惨で屈辱の敗北は、詩的表現をのぞいて、文学活動に不適當な条件を創りだした。

パリが、ドイツの手に落城した頃、ファシズムの波はまだフランスまで

おしよせていなかった。ドイツを逃れてスイスにいたトーマス・マンを訪ねたジッドの言葉が、これをよく代弁している。

「我が旧大陸に打ち寄せてくるのを、トーマス・マンが不安げに眺めている野蛮の波は、まだあまりフランスには被害を蒙らせてはいない。従って、多分その為だろうが、フランス国民諸君よ、私はマンよりも暗澹<sup>12)</sup>たる気持になる程度は少ないのだ」

このジッドの文は、フランス作家の、フランス国民のその頃の事情をよく説明している。だが、この後にきたフランスの不幸は、事実上のフランスの細分化、分裂にあった。ナチスの圧迫下にあって、作家たちは栄光の沈黙にとどまるか、逃げさるか、殺されるか、ペンを取るかの方法しかなかった。この中にあって、劇的な誤ちをおかしたのが、シャルル・モーラスの例であった。彼は、当時の精鋭なる執筆陣をこの抵抗の四年間においてファシズムに傾かせた。だが、ナチスの保護のもとにある体制を鼓舞するという誤ちのゆえに、終には自爆を遂げる運命に落ちいった。この『アクション・フランセーズ』の若き賛同者たちの師と自ら認じていたシャトーブリアンも、結局は読者を失った老作家と化してしまった。同様、重大な誤ちをした別の一派は、『N・R・F』を対独協力により、英雄主義を望み、ヴィシー派の御用紙としてしまったドリュ・ラ・ロシエルがいたが、彼とてもファシズムに身を投じたあと、自分の理想が瓦解するのをみて自殺に追いやられたのだ。

一方、ナチスにたいする軽蔑の念を抱きつつ沈黙していた作家たちは、『国民作家評議会』を結成し、抵抗運動の一環として抵抗に身を投じていたものもいた。彼らこそ、若くして第一次大戦を体験し抵抗の文学を生みだした作家たちで、その中にはエリュアール、マルロー、アラゴンらがあり、この抵抗によって大きく育てられたサルトル、エマニエル、ベルコー

ル、カイヨワらが真の文学活動を行っていた。特に、プレボーやマルローは、積極的に抵抗に参加し戦闘に従い、自らマキを組織していた作家ではあったが、プレボーは高貴性に輝く未完の作品を残したままドイツ軍に統殺される。時、サン・テクジュペリー行方不明の翌日のことである。

地下の文学活動は、戦いに意味をあたえ、勇気に価値をあたえた。この抵抗の四年間において、祖国への愛情と侵略者への憎悪を示すという新しい人間観は、まず詩的活動に最も強くあらわれた。アラゴンやエリュアールの抵抗を讃えた詩集は匿名で、しかも秘密出版されたのにもかかわらず、群衆の心にすぐさま溶け込んでいった。これは、フランスの敗北とその占領が詩にたいして好都合をもたらし、なによりも新しい簡潔な型を詩は創りだしたからにほかならない。もちろん、自分の愛情を直観的かつ敏感に歌いあげることのできる詩の面に秀れた作品が多く生れたとはいえ、匿名で発表された抵抗の中から生れた短編小説は相当の数に昇った。これら短編小説の作家たちは、時間性の面からも、又書くにあたっての厳しい検閲のゆえに、一切の無駄をはぶき、純粋な短編を編みだすことに成功した。彼らの直面している現実について語る使命を背負っていた真摯な作家たちの中に、エルザ・トリオレや全くの新人ヴェルコールらがいた。とくに、トリオレは『アヴィニヨンの恋人たち』で、同じ家に生活することになったドイツ将校にたいし、最後まで口を結んで開かないフランスの一乙女の姿を描き、フランス国民の沈黙の美しさと感情の緻密さを創りあげること成功したが、抵抗そのものについて如実に描いたわけではなかった。これは、占領軍への抵抗を示唆した『他人の血』や『招かれた女』でも、同じことがいえるであろう。抵抗そのものを扱った作品は少なかったが、抵抗の中から生れた数多くの作品も、やがて長編へと座を譲ることになっていった。

ところで、サルトルが好意をもち『第三の世代』の文学的風土の先駆者として高く評価した作家のうちサン・テクジュペリーは、軍の飛行士とし

て戦闘に参加し、1944年7月敵の偵察飛行からの帰途、誰れからも目撃されず空の彼方へ消えてしまった。彼は、抵抗の四年間に、おびただしい数の作品を残したが、中でも1942年に書きあげられた『戦う操縦士』は、ナチスとの戦に参加した実戦記であり、抵抗らしい何ひとつの抵抗もせず、もろくもナチスの前にくずれ落ちたフランスの運命を語り、停戦を批判した数少ない戦を語った成功作であった。彼は、単にナチスからの解放を願って抵抗するのではなく、自分自身にたいする、人間にたいする抵抗の意味を示した。「私は抵抗するものしか愛さない」<sup>13)</sup>といい「己に抵抗しなければ人間というものはない」<sup>14)</sup>と語る言葉は、既に『人間の土地』で示されていた。彼は、人間の抵抗する不屈なうるわしさを知り、この四年間の抵抗の空虚さの中をさまよい歩く人間に、目的や規範やはっきりとした自由を確保させようとした。そのため、常に変らぬ理想とともとれる愛情によって、自分を越えたところに新しい像を描き、人間の心の中に城砦を築こうとした。それゆえにこそ、サン・テクジュペリーは自分の行為の中で、内面の苦しみに攻めつけられていたのである。アンドレ・マルローは『アルテンプルグのくるみの木』以来、小説活動をあきらめたかにみえる。フランスの抵抗と第二次大戦は、彼に『人間の条件』や『希望』以上のテーマを与えたはずであるが、栄光のうちに沈黙をまもり龐大な美術に関する思索にとじこもり、「われわれに、小説の偉大な源泉は涸れはてたのではないか」<sup>15)</sup>という例を示している。又、ケストラーは、もはや文学とは無縁となり、ルーセは「収容所的」という形容詞を創りだしただけにとどまっている。精神よりも社会、経済に想いをめぐらしたところに、ルーセの誤りと限界があった。ケストラーとルーセをわれわれの世代の作家に加えたサルトルではあったが、それはあくまでサルトルの1940年代の政治姿勢に関係があっただけのことで、注目すべき点はあったとしても、小説というにはほど遠いのである。

『深夜叢書』の中には、抵抗という歴史状況に想をえて、戦争の悲惨さ

と人間関係の非人間化を描いた傑作『海の沈黙』があった。サルトルは、この著者ヴェルコールに評価をくださったかにみえたが、ヴェルコールの戦後のいくつかの作品は、これほど高い水準には達していない。又、サルトルは、文学作品を宣伝に使うことを認めず、アラゴンやトリオレを同時代の作家に加えていなかった。これは、コミュニスト作家との間に常に一線を保ち、彼らの要求するものと根本的に異なるものを文学に求めるサルトルの態度としては当然であったが、最近の態度には『文学とはなにか』の頃の強い硬化した姿はない。サルトルの高く評価したアンガージュマンの作家はもういない。あの秀れた作品を発表し、戦後派の一方の旗頭になるはずであったカミュさえもが、自分の才能を全面的に花咲かすことができなかった。ボーヴォワールやマルローの回想録は、自分たちの文学上の終焉を意味しているのではないであろうか。

マルロー、サルトル、カミュ、ボーヴォワールの戦争や抵抗からの重要な靈感を、若き作家たちが受けつぎ、最も新しい文学を築きあげようとした。しかし、これとてただいたずらに人間の不安や苦悩のテーマをひねくりまわしただけにとどまり、独創的な作家はまれだったのである。今日のフランス小説の方向を示した何人かの作家のうちでも、サルトル、カミュ、ボーヴォワールはあの実存主義の範疇に属している。サルトルの自由への道を進む主人公も、カミュやマルローの主人公も、行動、義務、革命といった生そのものへの問をしつづける。サルトルが人間の自律性と諸権利とを守るため身を捧げようと説くとき、人間だけが意味をもっているとカミュの主張するとき、人間がその状況を越えるときが大切だとするボーヴォワール、そして、非人間化してゆくなかで、人間を守るために捧げたマルロー冥想は、「実存主義とはユマニスムである」という姿勢を如実にものがたっている。ただ、そこには、この実存主義に属する文学にあびせかけることになった矛盾——神の不在、あらゆる価値いっさいの否定、人間性の否定——は残っている。ひとりボーヴォワールは、神の不在は放縦を許

すどころか、人間の行動にたいし、絶対的な性格を与えと言った。この点のみが、サルトルの理論に忠実である彼女を、サルトルと区別するものなのである。

戦後派の作品は、サルトルとカミュ、(もし加えるとすれば『野性の女』で彼らに近いことを示したアヌイ)を軸に展開してきたといえる。だが、彼らの仕事が一段落した今、変ってアンチ・ロマンとかヌヴォー・ロマンと呼ばれる作家が台頭してきた。シモン、サロート、ビュトール、ロブ・グリエ、デュラス、ベケットらの活躍は、今ではフランス文学を代表している。彼らは——たぶん、彼らの作品がすべて同じ出版社(エディション・ド・ミニュイ)から刊行されている関係からか、遅ればせながらにこの流派に参加し、1940年代にサルトルより賞讃されたサロートをのぞけば——皆、1950年代に書きはじめた作家たちである。彼らの作品が、今はまだ聖列に加えられていないにしろ、戦後派の作家の伝統は受けつがれいてるようである。事実、ロブ・グリエは、『嘔吐』と『異邦人』から深い影響を受けたことを示した。サルトルが『嘔吐』の中でロカンタンに云わせた、結末からはじまるとした台詞は、ロブ・グリエの『自然・ヒューマニズム・悲劇』の主張と変るものではない。だが、ロカンタンの他人の中で生きながら存在の不条理を見つけだした自由さは、もうベケットにはない。ベケットの主人公たちには精神の自由ささえない。さらに、ロブ・グリエにはカミュの見せた不条理とか対立といった悲劇性もない。「世界は、意味もなければ不条理でもない。ただ単に、そこに『ある』<sup>16)</sup>だけである。」

ビュトールは、戦後派の作品とヌヴォー・ロマンとの間に関連性のあることを示している。確かに、新しい作家たちは、前の世代の作家が提示した問題を探求しようとしていた。前代の作家の貴重な成果がなければ、ヌヴォー・ロマンは誕生しなかったであろう。この点では、戦後派作家の意思は、新しい作家の間に受けつがれている。彼らが、サルトルやカミュの牙城に迫ろうとしている今日、「新しい小説の重要さは、それがもたらし



たものより、小説の危機の真最中に出現した事実である<sup>17)</sup>」といった言葉にも耳を傾けないわけにはいかない。ビュトールや、ロブ・グリエやサロートの進んでいる方向の相違は、まだ新しい小説がサロートのいう「疑惑の時代」から抜けでていないからとも言えるであろう。いずれにしろ、新しい小説にたいする評価は、いま少しの時間が解決してくれるであろう。新しい文学のジャンルが頂に達するとき、同時に下り坂をおりはじめることを意味している。そこには、又も別な革新が用意されているのだ。最後にロブ・グリエの示したアンガージュマンの概念を掲げておきたい。

『アンガージュマン』とは、(政治的性質のものではなく)作家にとって、自分自身の言語の現在的なもろもろの問題にたいする完全な自覚であり、それらの問題が極度に重要なものであるという信念、それらの問題を内部から解決してゆこうとする意思にほかならない。<sup>18)</sup>

- (注) 1) R. Martin du Gard : Les Thibault  
2) Saint-Exupéry : Citadelle  
3) // : Vol de Nuit  
4) J.P. Sartre : Qu'est-ce que la littérature  
5) Ibid //  
6) Ibid //

サルトルは、現代文学の見取図を、三つの世代に区別して、  
第1の世代は、1914年の大戦以前に製作を始めた作家たちであり、  
第2の世界は、1918年以降に大人になった年令であり、  
第3の世代は、敗戦後、又は今次大戦より僅かに先立って書き始めた世代であるとする。

- 7) St-Exupéry : Vol de Nuit  
8) // : Lettre à un Otage  
9) Saint-Exupéry : Vol de Nuit  
10) Ibid  
11) 1913. 1. 17 アーネスト・コリンズ宛書簡

(In, C. Coldwell : Studies in a Dying Culture)

- 12) 佐藤晃一・山下肇『ドイツ抵抗文学』
- 13) Saint-Exupéry : Citadelle
- 14) Ibid
- 15) Pierre de Boisdeffre : Où va le Roman
- 16) Alain Robbe-Grillet : Pour un nouveau roman
- 17) Pierre de Boisdeffre : Où va le Roman
- 18) Alain Robbe-Grillet : Pour un nouveau roman